

## 日本語の連体形の消失とその補償

杉浦 滋子

### 1.はじめに

日本語では、かつて存在した連体形と終止形の区別は形容動詞以外では消失している。ところで、このような区別が存在したからにはその区別が伝達上のなんらかの機能を担っていたはずである。そして、その区別が失われたときには、それまでその区別が担っていた伝達上の機能はなんらかの形で補償が行われると考えられる。ここでは、連体形と終止形の合流がどのような表現機能の消失につながり、またその消失の補償がどのようなものだったかをたどってみる。

### 2.連体形の持っていた機能

まず、連体形にどのような機能があったかから見てみる。信太(1996)には連体形の機能として次のものが挙げられている。(土佐日記の例は信太より)

#### A 連体句

- (1)をとこもすなる日記といふものを(土佐日記)
- (2)いとにほひやかにうつくしげなる人のいたうおもやせて(源氏物語・桐壺)

#### B 準体句

- (3)からうたども時ににつかはしきいふ(土佐日記)
- (4)京へかへるにをんなごのなきのみぞ悲しびこふる(土佐日記)

#### C 接続句

- (5)国人の心のつねとして今はとて見えざるを、心あるものは恥ぢずぞなん来ける(土佐日記)

#### D 終助詞上接句

- (6)ふな糸いたうべりしみかほには似ずもあるかな(土佐日記)

#### E 連体形終止文

- (7)これがなかに心地なやむ舟君、いたくめでて「          」といひける(土佐日記)

#### F 係り結び文

- (8)ただ波の白きのみぞみゆる(土佐日記)

このようにいくつかの機能がある場合には、ひとつのものを中心的な機能ととらえ、その

他のものがそこから派生したものと分析できれば最も望ましい。上記の機能をそのように分析するとしたら、Aの「名詞的要素を主要部とする節の述部となる」という機能が中心的なものということになるだろう。そこで、この機能について詳しく見ていくと、名詞的要素を主要部とする節における名詞的要素と節の関係は大きく二つに分けられる。(9)のように、主要部である名詞的要素に語彙的意味がある場合と、(10)のように、主要部である名詞的要素に語彙的意味がなく、節を名詞化するという機能のみをもつ場合である。前者においては、節の中にひとつ欠けた要素があり、その欠けた要素が意味の上で主要部である名詞的要素と同一と理解される<sup>1</sup>。ここではその欠けた要素を の記号であらわし、同じ下付記号をつけることによって統語上・意味上の関係をあらわす。それに対し、後者では節の中には主要部と関係をもつ音形をもたない要素は存在しない。前者を関係節連体、後者を名詞化連体と呼ぶことにする。<sup>2</sup>

- (9) [ ..... i..... ] 名詞 i  
[ 男も i すなる ] 日記 i (源氏物語・桐壺)
- (10) [ ..... ] 名詞化要素  
[ かたかどをききつたへて心をうごかす ] こともあめり (源氏物語・ははき木)

しかし、両者の中間的な場合も見受けられる。(11)のように、主要部となる名詞が「時」「場所」「様子」など、事態に付随する要素をあらわすものであれば、節の中にゼロ要素として存在するとする根拠は弱い。また、(12)のように、「ついで」「なか」など、なんらかの関係をあらわす相対名詞の場合にも節が主要部を修飾するものの、節の中にはゼロ要素を想定する根拠がない<sup>3</sup>。さらに、(13)のように主要部となる名詞の内容を節があらわす場合や、(14)のように、主要部の名詞と節の関係がより曖昧で、例えば多重主格構文の大主語のように解される場合もある。

- (11) [ ..... ] 名詞  
[ ~とうめきたる ] けしき (源氏・ははき木)
- (12) [ ..... ] 名詞  
[ ~ときこえ給ふ ] ついでに (源氏物語・ははき木)  
[ こまうどのまいれる ] なかに (源氏物語・桐壺)

<sup>1</sup>ただし、日本語はゼロ代名詞をもつ言語であるので、節の中に音声的に実現されない要素が主要部の名詞と統語的な関係をもつのか、それとも他の要素と同一指示であるのが注意が必要である。先行文脈に先行詞をもつゼロ代名詞の場合には pro と表記して区別する。

<sup>2</sup>近藤(1980)は同一名詞連体と付加連体にまず二分し、付加連体をさらに同格連体とその他の付加連体に二分している。同一名詞連体は関係節連体と同じものであるが、ここで名詞化と考えるものは同格連体の一部とされる。

<sup>3</sup>奥津(1974)で「相対連体」と呼ばれる。

- (13) [ ..... ] 名詞<sup>4</sup>  
 [ おとどまいりたまふべき ] めし (源氏物語・桐壺)  
 [ 本意深くものしたりし ] よろこび (源氏物語・桐壺)
- (14) [ ..... ] 名詞  
 [ うしろみ思人もなき ] まじらひ (源氏物語・桐壺)  
 [ 牛死にたる ] 牛飼い (枕草子・すさまじきもの)

次に、Bの準体句は連体形の用法とされるが、音声的に実現されない名詞(ゼロ名詞)があると見ることができるが、ここでも関係節連体と名詞化連体が見られる。<sup>5</sup>

- (15) [ .....<sub>i</sub>..... ] pro<sub>i</sub>  
 [ せちに<sub>i</sub>かくし給べき ] pro<sub>i</sub>などは(源氏物語・ははき木)  
 (proは先行文脈にあらわれる「手紙」を指す)
- (16) [ ..... ]  
 京へかへるに [[ をんなごのなき ] ] のみぞ悲しびこふる

同一名詞連体で主要部が「時」「人」などの一般的な概念をあらわす場合には先行詞としてあらわれていなくても用いられる。<sup>6</sup>(先行詞をもたないゼロ名詞はeと表記する。)

- (17) [ 月の面白き ] eに(源氏・桐壺) (eは「時」と理解される)  
 (18) [ さるべきすぢならぬ ] eは(源氏・ははき木) (eは「人」と理解される)

さらに、主要部の名詞的要素がゼロである場合には、次のように、節の中にあらわれる名詞句が意味的に主要部となると解釈されるような構文が用いられる。

- (19) [ ..... NP<sub>i</sub> ..... ]<sub>i</sub>

<sup>4</sup> (13)のタイプは、現代語において「という」を用いた場合「という」が伝聞の意味をもたないという点で他のものと異なる。

(i)大臣が参上するようにという命令  
 (ii)本意をとげた(という)喜び

<sup>5</sup> どちらとも異なるように思われるのは、次のような知覚動詞の目的語である。中間的とも言い難い。

(i) [ pro きていりつつものし給 ] を御覧ずるに (源氏・桐壺)  
 (ii) [ わがふたつの道をうたふ ] をきけ(源氏・ははき木)

<sup>6</sup> 下の例は、「程度」「時」という一般的な概念がゼロ名詞であらわれていると解釈できるが、表現の固定化がすでに始まっているのかもしれない。

(i)御かたちありさまあやしき までぞおぼえ給へる (源氏物語・桐壺)  
 (ii)夜ふくる まで(源氏物語・桐壺)

[ しろき御そとも<sub>i</sub>のなよよかなる ] <sub>i</sub>に (源氏物語・ははき木)

[ ねたりけるこ糸のしどけなき ] <sub>i</sub>いとよくにかよひたれば (源氏物語・ははき木)

Cに見られる助詞は本来的には名詞につくものと同一であるので、Cについてもゼロ名詞を含むと考えた方が説明しやすい。

(20) [ 鳥もしばしばなく ] に 心あわだたしくて (源氏・ははき木)

D, E, Fについては今回検討の対象としない。

### 3. 準体法の補償

本論では、終止形と連体形が合流したことによって失われたのは連体形の機能の表現であり、失われた表現機能は少なくとも部分的には別の形式によって補われたとの立場である。この主張を支持する根拠として、次のものを挙げる。

(I)連体形と終止形の区別があったときには存在した準体法が、合流の後にはなくなり、音声的に有形な名詞的要素があらわれる。

(II)準体法を含む構文が固定化した表現としてのみ残っている。

(III)現在では生産的でない補修方法が固定化した表現として残っている。

3.1では(I)、3.2では(II)、3.3では(III)の例を挙げる。

#### 3.1 (I)音声的に有形な名詞的要素による補修

準体法でないAの場合、つまり主要部の名詞的要素が音声的に実現されていれば、なんの補償もなく、従来の連体形の代わりに終止連体形が使われている。しかし、Bの準体法の場合、つまり音声的に実現されない名詞的要素が主要部であるときには、音声的に実現される名詞的要素があらわれるという補償が行われる。主要部のゼロ名詞の先行詞が先行文脈にある場合にはその名詞もしくは「の」「やつ」のような名詞の代用形を用いればいいが、主要部がそのような語彙的意味をもたない場合には形式名詞を用いる(もしくは既存の名詞を形式名詞として用いる)ことが必要となる。

(21) 絶対にお隠しにならねばならない{文/の}などは

(22) 月の美しい{時/折/夜}に

(23) しかるべき血筋でない者は

(24) 女の子が亡いことのみ悲しむ

(19)のタイプのものについても、形式名詞「の」が用いられる。<sup>7</sup>

<sup>7</sup> 次のタイプのものも「ところ」を用いた補修であるのか、今後調査が必要である。

(25)[ しろい外着<sub>i</sub>のしなやかな ] の<sub>i</sub>に

### 3.2 ゼロ名詞を含む形で固定化した表現

(25)のようなことわざや成句、(26)のような構文が固定化した表現として存在する。(25a-d)の内容を現代の日本語で表現するなら、下線部の動詞に「の」「人」など、音声的に実現される名詞が主要部としてあらわれる必要があるが。それを含まない形でことわざ・成句として固定化している。

(26a)稼ぐに追いつく貧乏なし

(26b)逃げるが勝ち

(26c)聞くも涙、語るも涙

(26d)案ずるより生むがやすし

(27a) X に違いない

(27b) X が早いか

(27c) X にたえない

### 3.3 現在形式名詞として用いられない形式を含んだ固定化した表現

現在の標準語では「の+で」という形式が理由の接続詞として広く使われる。しかし、「もの+で」「ところ+で」という形式も、より制限された文脈においてではあるが、理由の接続詞として用いられる。

(28a)バスがなかなか来なかったので遅刻した。

(28b)出掛けに来客があつたもので遅くなりました。

(28c)忠告したところで聞きはしない。

このことは、補修の過程において、「の」が形式名詞として定着する以前に「もの」「ところ」も命題を名詞化する際に用いられていて、それらを含む表現が固定化したと考えれば説明できる。また、通時的資料で「ところ+で」が現在より広く理由の接続詞として用いられていたこともそれを裏付ける。

(29a)此筒の中に、びなん石が御ざります所で、お前のおつむりへ付けねば、結われませぬ (狂言記 烏帽子折り)

(29b)それは終に持たた事が御ざらぬ所で、持ちやうを存ぜぬほどに (狂言記 鹿狩)

---

(i) 泥棒が逃げるところをタックルしてつかまえた。

ほかに(30)に見られる固定化した表現において「もの」が含まれるのは、命題を名詞化するために一時期使われていたことを反映していると考えられる。

(30a) そんなこと知るものか。

(30b) 怪我がなかったからよかったものの、今後は気をつけなければならない。

(30c) しばらくこの傾向が続くものと思われる。

(30d) 忙しかったんだもの。

(30d)のような用法は、「浮雲」では「を」を後接する形で用いられていたことから、古文で詠嘆をあらわす終助詞「を」が連体形に後接する用法において、「もの」が形式名詞として補修に用いられたことに由来すると思われる。

(31a) 「それでも貴君<sup>あなた</sup>が健康な者にはかえって害になると仰ったものヲ」(浮雲・お勢)

(31b) 「呼んでも呼んでも返事もしないだものを」(浮雲・お勢)

(31c) 「だッてお奥で用事をしていたンですものを」(浮雲・お鍋)

#### 4. 方言差に見る補修の時間差

3 では連体形と終止形の合流で失われた表現機能の補償が行われたと考える根拠を挙げたが、方言資料を見ると、(II)(III)において、標準語や代表的な方言の通時的資料とは異なる様相が窺える。

理由の接続詞として標準語では「ので」「もので」「ところで」が見られたが、一部の方言においては「で」という理由の接続詞が存在する。

(32) アタマガ イテァーデ オキレン (岐阜、愛知、三重、鳥取、島根)

この方言間の違いは、標準語などでは補修が行われたのちに当該表現が固定化した、(32)のような形式をもつ方言においては、表現が固定化した段階では補修が起きていなかったと考えることで説明できる。逆説の接続詞についても同様に、方言間で「の」を含むか否かが異なるが、これも同様の説明ができる。

(33a) 折角植えたのに枯れてしまった

(33b) セッカク ウエタニ カレテマツタ

また、青森方言においては理由の接続詞として「ドゴデ」が用いられるが、これは狂言記に見られた「ところで」と同一と考えられる。

(34) ジェンコ ネア ドゴデ (青森県青森市大字牛館方言談話資料 3:30)

金が ない ので

また、標準語では「～というの」という形式が新情報を導入する形式として存在するが、いくつかの方言において「の」などの形式名詞を含まない形で固定化している。

(35a) 鳥取県八頭(やず)郡郡家町奥谷『方言談話資料集』6:64

ナンジューゼンチュー- -オ モラッテ

(結婚の祝いの重箱) 何十膳というのをもらって

(35b) 群馬県利根郡利根村大字追貝『方言談話資料集』1:184-5

アズマカンチュ- -デ

東館という場所で

(35c) 愛知県北設楽郡富山村中の甲『方言談話資料集』7:220-221

ウミノ ウエニ サンバシテーシャバチュー- -ガ アッテナー

海の上に棧橋停車場というのがあってね

(35d) 神奈川県愛甲郡宮ヶ瀬村NHK全国方言資料第2巻 p.295

ヒロシマッテユ- -ガ アソコニイタダワ

広島っていう人があそこにいた

(35e) 新潟県佐渡郡羽茂村大崎 NHK全国方言資料第8巻 p.92

ホトンド イガナ アルモンチュー -ワ ネアーガ

(稲について) ほとんど ノギのあるものというのはいよ

(35f) 石川県輪島市海士町 NHK全国方言資料第8巻 p.156

ウニョーノ ゴーゾーチュー- -ガ アッテ

鵜入のゾーゾーという場所があって

また、岡野(1974)によると、福岡県飯塚市八木山方言ではソレチューガという接続詞がある。

ほかに、標準語などで「～方がいい」という形で固定化した表現が、下の方言では主要部名詞を含まない形で固定化している。<sup>8</sup>

(36) 茨城県新治郡葦穂村終助詞がNHK全国方言資料 第2巻:57

---

<sup>8</sup> 下のような例(千葉県安房郡富崎村布良NHK全国方言資料第2巻 p.226)は同じ形式だが、標準語では「～方がいい」より「～するといい」に相当する。

(i) イッパイ カッテ ノム- -ガ イーヨ (千葉県., NHK2:226)

アンマリ ナガドマリ シネー- -ガ イーゾ

また、次のような表現も残存的なものである。

(37a) 鳥取県『方言談話資料集』6:100

ジューチダッタゼ アリヤ ヤマモトカラ アノ タジマヤマモトカラ コラレター  
十七(オ)だったよ あれは 山本から あの 但馬山本から (嫁に) 来られたのは

(37b) 兵庫県城崎郡城崎町飯谷NHK全国方言資料第4巻 p.318

モドッテキタガ ウレシカッタヤナー  
戻って来たのが うれしかったんだな

(37c) 奈良県十津川村小原 NHK全国方言資料第8巻 p.200 m

ヒスーガ カカルガ ワリヤージャ  
日数が かかるのが 割合だ、あれは。

## 5. 結び

本発表では、連体形と終止形の合流が機能の面では連体形の消失ととらえられること、そしてその消失に伴って表現機能を維持すべく補修が行われたことを主張した。さらに、固定化した表現が形式名詞を含む形式であるか否かは、各方言において補償と当該表現の固定化のどちらが早く起こったかを反映するものとした。

## 参考文献

- 江口 正弘(1990)「天草版平家物語の動詞について 連体形の終止形化について」『熊本大学国文研究 36』(『日本語学論説資料 27』に再録)
- 岡野信子(1974)「方言の文法・表現法の記述 福岡県飯塚市八木山の方言調査にもとづいて」『国文学解釈と鑑賞』49-7(増) 日本列島方言叢書 24『九州方言考』 pp.361-376
- Kuroda, S.-Y. (1974-77) "Pivot-independent Relativization in Japanese I, II, III." *Papers in Japanese Linguistics* 3,4,5
- 奥津敬一郎(1974)『生成日本文法論』大修館
- 国立国語研究所『方言談話資料』
- 近藤 泰弘(1980)「中古語の準体構造について」『国語と国文学』58-5
- 信太 知子(1996)「古代語連体形の構成する句の特質 準体句を中心に句相互の関連性について」『神女大國文 7』(『日本語学論説資料 33』に再録)
- 日本放送協会編『全国方言資料』日本放送出版協会
- 橋本朝生他校注(1996)『狂言記』(新日本古典文学大系 58) 岩波書店
- 平山 輝男他編『現代日本語方言辞典』明治書院